

平和祈念資料館に行つて

八重瀬町立具志頭小学校六年 伊関 菜喜

「自分の先祖が生き残つたと思うだけでなく、生き残っていてくれたから今の自分がいると考えるのか。」

私は、学校の総合学習で沖縄戦についてくわしく知るために平和祈念資料館へ行きました。

資料館で戦争について学ぶ前、私は沖縄戦の事についてあまり知りませんでした。少しは知っているとしても戦争はおそろしくて人々は自由にくらしえないという事だけでした。

私が平和祈念資料館に行つて心に残つた事は、担当者の新垣さんの話と、当時の人々の写真です。話の内容はいつから戦争が行われていたのかや、戦争を行った理由、自分は生き残つた人々をどう思えばいいのかでした。その話をして下さつたおかげで、沖縄戦がいつ始まつたかも知らなかつた私が今では沖縄戦は、一九四五年に始まつたと答える事が出来たり、戦争が起こつた理由を答えたりすることが出来るようになりました。

新垣さんの話で一番心に残つたのは、自分たちは生き残つた人々をどう思えばいいのかということでした。「自分の先祖が生き残つたとおもうだけでなく、生き残つてくれたから今の自分がいると考える」という新垣さんの話を今でもおぼえています。

私は東京出身でおじいちゃんもおばあちゃんも沖縄戦を経験していませんので私には全く関係がないと思つていましたが、母に聞くと私のひいおじいちゃんが兵隊として本州から沖縄戦に行つていたというので、そのころから自分も沖縄戦と関係があると思うようになりました。だから平和祈念資料館へ行つて展示物を見たときは、自分のひいおじいちゃんは生き残つたのかなと疑問に思いました。そこで家に帰つて母に聞いてみると母は表情をやつとさせながら、

「生き残つたよ」

と言つていました。その時私はほつとしておちついたので同時に新垣さんの「自分の先祖が生き残つたと思うだけでなく、生き残つていてくれたから今の自分がいると考える」という言葉を思い出しました。

「あつそついうことか」

と思わず声を出してしまいました。新垣さんの話の意味が分かつたからです。さらにその時自分の今までの考えをふり返つてみました。

その夜、母と夕食を食べている時に、平和祈念資料館へ行つて気づいた事や分かつた事などを話しました。なぜなら母にも沖縄戦について知つてほしいと考えたからです。

今回平和祈念資料館へ行つて沖縄戦について学べたことはいい機会だつたと私は思いました。

私は今回学んだことをむだにするわけにはいけないと思い、なにかに役に立たないかなと考えました。そこで

「あつ」

と思いついたのが沖縄戦をまだ知らない人たちにも自分が分かる事を教えてあげようということでした。まだ世の中の日本人には沖縄戦のことをよく知らない人、または自分に関係がないと思つている人がいるかもしれないと思つたからです。

私が特に伝えたいことは、「自分の先祖が生き残つたと思うだけでなく、生き残つていてくれたから今の自分がいると考える」という事です。私は、県外の人や、戦争について知らない若者に沖縄戦について教えたいと思つていました。

また、これから世界が永遠に戦争がなく平和な時代になつてほしいと願つています。